

菅原道真は天才か？

わが国第一の学者と言え、まず最初に挙げられるのは、菅公菅原道真でしょう。菅公は、三歳ごろにはすでに漢文がすらすらと読める天才であった、と伝えられていますが、私は、これについては、次のように考えています。

三歳で書物が読めるということは、実は、私の実験によれば、天才でなくとも、“だれにでもできる”ことなのです。しかも、この時期における読書は、子どもの頭の働きを活発にし、知能を高めることも、すでに科学的に証明されています。

つまり、菅公は、「天才だから、三歳で書物が読めた」のではなくて、逆に、「三歳から書物を読んだので天才になれたのだ」というのが私の見解なのです。

大脳神経細胞は生後三年間に

最近の生理学では、人間の思考活動を司る大脳の神経細胞は、生後の三年間に、成人の半分くらいのところまででき上がる、と言われ

ていて、この時期の幼児の、摸倣し吸収する能力は、驚くほど高いのです。

与えられるものは、まるで乾いた海綿が水を吸収するように、何の抵抗もなくこれを吸収して成長するのです。

余りにも当り前すぎて、人は考えてみようと思わないのですが、「言葉覚えて、これを使う能力を発達させるのは、生後の三年間である」ということに、私たちは注目する必要があると思います。

つまり、この時期は、「物を吸収する能力が、一生のうちで最も高い時期なのだ」ということで、この事実を、私たちは漫然と見過ごしてはなりません。

おとなが外国語を学ぶ時には、その国に十年間住んでも、なかなかその国の人のように話せるようになりません。ところが、幼児は、半年もしないうちに、その国の人と全く同じように微妙なアクセントでも、幼児はたやすく覚えて、それをそっくりまねすることができますが、おとなには、どんなに努力しても、このまねはできません。

おとなは、幼児期におけるこの能力を、正しく認識することが大切です。そうでないといくら努力しても、効果ある教育はとても期待できません。

というわけは、この能力は、それが芽ばえるところから数年の間に、その能力をできるだけ使うようにしないと、その能力が発達しないばかりか、全く失われてしまうことがわかったからです。

また、最近明らかにされたことですが、聴力のようなものでも、生後、母親などの声を耳にすることによって次第に発達するものであって、いろいろな声を聞き分ける聴力が、初めから備わっているのではないのです。

たとえば、今までなら、先天的なつんぼと言われる者でも、多くは、単に聴力が普通より少し劣っているというだけのことであって、ただそのために聴覚的刺戟の受け取りが普通の人より少ないために、聴力が育たず、従って、いわゆるつんぼになるということがわかったのです。

だから、早期にこれを発見して、聴覚的刺戟を普通よりも強く与えることにより、聴力を発達させ、正常なものに引き上げることができるのです。

人間の能力は育てるもの

つまり、人間の能力は、初めから完成しているのではなくて、それを使うことによって育てていくものです。適切な刺戟を与えてそれに反応させることを反復練習させるならば、人間としてのすばらしい力が育つのです。

ただ、その能力を育てるためには、それに適した時期があるのであって、その時期を失ったら、どんなに努力しても育たなくなってしまうことを忘れてはなりません。

現代の科学は、このように、人間のいろいろな面をそれぞれに深く掘り下げて追求し、次第にこれを明らかにしています。私たちはこの明らかにされた事実に従い、より有効な教育法を考え出し、これを勇敢に推し進めていくべきだと思います。

人は、新しいことを実行する場合には、常に危険を感じてためらうものです。しかし、ためらっている限り前進はあり得ません。

一歩進めば、それだけ今まで見えなかった世界が見えて来ます。その時、危険だと知ったら退けば良いのです。そうでない限りは、一歩、一歩、慎重に前進すべきです。そういう態度で人類は今の文化を築き上げたのであって、私たちは、やはりその道を歩む義務があると、私は思うのです。